

せられたるが故に自動車交通に對しては國道に於ても充分なる安全視距なく曲線半径も極めて小なるもの多く十米のものも局部に存在して危険且不經濟であるから、その地況に應じ自動車の機能に對應する安全且經濟なる線形に速かに改良を要す。

(ハ) 軌馬も主要なる運輸機關であるから之が經濟的運行を計らんとすれば急なる勾配の改良を要する、國道に於てすら隨所に散在する勾配一〇%の坂路などは速かに緩和すべく更に進で經濟的勾配としての滑走勾配、惰走勾配の

北海道打診

診 (一)

瀧川勸則

程度に改良するは極めて必要である。

(ニ) 冬季積雪の深さ大なる區間は、積雪の被害を可及的輕減する樣路線を變更し若くはその法面を緩和し路面の雪厚を減し又は排雪し易からしむる様に改良するを要する。

而して之らの施設は氣象作用の影響を受くる事大であるから施工の時機が極めて重要であつて施工不可能の期間も相當に永いから有効なる時期を空費する事ない様に順序を定めなくてはならぬ。

(一)

圖らずも北海道へ旅行する機會を與へられ親しく其の實情を視察した、主として土木事業特に道路施設を目的とし

たのであるが其の廣漠たる大自然に接し、陸と海との別なく無盡に包藏せらるゝ富源を目撃し、之が開發の根幹たる交通施設を顧るとき其の擴充と改善とを希はざるを得ない、會つて同情と憐愍とのみを以つて北海道を遇した私は

今や認識の大半を訂正し羨望と鞭撻とを以つて之に報いむとする、百聞は一見に如かずといふ言葉があるが、こんなに痛切に感じたことはない、人間はどうしても耳から得た知識だけでは正確な認識を得ることが難かしい、曾て文書を通し或は人の口から色々なことを知つて居た、しかし是等の殆ど總ては、本州は北海道に優るとの前提の下に、本州と北海道とは如何に相違するか、換言すれば本州との比較に於て北海道の悪いところにはばかりに觸れてゐたのであつた、従つて良い點は自然忘れられ、悪いところばかりが強く頭に焼付けられる、假令は北海道の人が東京へ來て話しをする何か變つたことを持出さぬと面白くない、そこで熊が驛遞へ暴れ込んだとか、熊と一騎撃をしたとか、牛の頸につららが下るとか突飛なところを一席辨する、又北海道を視察した人も同様な心境から、函館市の中央通路で樽拾ひの子僧が溺死したとか、自動車と熊とが國道上で數十分睨めつこをしてゐたとか、兎に角珍談ばかり聞かせてくれる、小説や紀行には、吹雪、監獄部屋、津輕海峽の嵐な

どばかり表現される、従つて行政上最も大切な一般狀況が疎になり、一短季の烈寒を以つて四季に通ずる如く、一部分の特殊狀況を推して全道然るが如く誤解し、北海道は飛んでもない所だ、一廉の豪傑でない限り渡道して成功するなど思ふよらぬなどと思つてしまふ、是等のことがやがて眞の北海道を理解し得ない先入主となるのではあるまいか、甚だ卑近なことではあるが心すべきことと思ふ。

又一般人も北海道へ轉任を命ぜられたりすると左遷だなどと考へ行き齷るようであるが誠に遺憾である、私は寧ろ北海道こそ、有能の士の快腕に俟つもの誠に多しと叫びたい。

勿論北海道は本州とは隨分變つてゐる、しかし常識では想像も出来ない程住悪いところだなど、考へるのは大きい間違である、北海道を旅行した總ての人が感ずることはそこに生活する青年男女の總てがいかにも容姿麗はしく健康に秀れ堂々たる體格の所有者であることと其の風景が極めて雄大であることだ、路邊の雜草から移民の假屋に啖くダ

リヤまで床しく繁茂した様は到底凡庸ならざるを知るのである、私は將來日本に於て英雄豪傑を生む山河は北海道なりと豫言する。

先年の萬國オリムピック遠征軍の陸上主將南部忠平君や水上主將根上博君は既にその片鱗たる近代的英雄である、又現に滿洲國や中華民國方面で活躍する多くの若人中には、北海道で生れ北海道で鍛へた北海道大學出身者が非常に多いのである、將來東洋を背負つて立つような大人物の生れるのを期待するも決して無駄ではないと信ずる、と同時に北海道自身も現在では、政府から拓殖費といふ養育料を貰つて成長しつゝある身ではあるが、この坊ちやん總身に智慧の廻り兼ねたりと雖も決して凡庸の器に非ず、今後の修業如何に依つては我國の産業上樞要な地位を占め、やかましい人口問題や食糧問題解決の萬分の一位には役立つ豪傑に生立つ素質を持つてゐる。

從來北海道に付ては種々悲觀論も行はれてゐるが之は人間の力を以つてしては到底自然を征服し得ないとの結論

からくるものようである、そこで問題になるのは北海道の氣候である。先南端の中心函館市から調べて見よう年内最高三十度五分、最低零下十四度二分であるから獨逸の首都ベルリンよりも暖い、東京でも時々零下十度位になるのであるからあまり大したことはない、札幌では最高三十二度六分、最低零下二十二度二分、北部の中心旭川市では最高三十四度五分、最低零下二十七度九分で稍大陸的氣候のド味ではあるが尙寒さはソビエットの首都レーニングラー氣などより餘程暖い、暴風の記録も南方のそれに比し良好で吹雪も東北のそれに比し返つて小量である、之を以つて見ても文化の進運を阻害する程の烈寒とは思はれない、更に農産物の豐熟と住民の健康な事實とを併せ考へるならば寧ろその良好なるに驚く位である、勿論冬季三箇月位は所謂冬眠の時季として屋外の活動は特殊の生産に限られるのであるが、本道重要生産たる木材は此の季に於て伐採せられ積雪を利用して搬出せらるゝのである、冬眠の時季と謂つても我々人類のそれは動物の冬眠と異なる、薪炭は豊富で

あり、移民の假家アイヌの笹小屋にまで充分防寒の注意が拂はれてゐて屋内の活動は自由である、四月ともなれば春風騎蕩、草木一勢に新芽を競ひ生くる者の喜びを切實に感受し得る、冬眠から覺め千里際涯を知らない原野に立つて胸を張り清淨な大氣を味ひ得た心地は我々想像するだに羨ましい、五月には梅櫻一時に開花し、盛夏となり我等が炎熱に汗と芥とにまみれて宿命の生活に喘ぐとき彼等は涼しい日々を過してゐるのである、九月下旬には山野一時に紅葉と化し其の色彩は鮮麗、針葉樹林を背景に點綴する廣大なる景觀は本道以外に於て味ひ得る處でない、私は宛も此の時季に阿寒及大雪山を訪れたのであるが、亭々として然も盡くるところなき原生林と謂ひ、紺碧湛々たる大湖と謂ひ、左顧右眄一として雄大性を感受せしめざるはない。

斯く述べ來ると北海道の將來に付き甚だしく樂觀してゐる様に聞へるかもしれないが、決して樂觀論を稱へて居るのではない、只一度や二度の凶作や冷害を以つて悲觀の種とするに足らないと謂ひたいのである、由來人類は南へ南

へと進出する本來の性質を以つてゐる、これは南半球に於ては北へ北へと進出する習性であるかもしれないが、この習性に抗して北方經營を行ふことの難事たるは謂ふまでもない、北海道拓殖の歴史に徴するも、之が寶庫を開くの極めて困難なるは申すまでもない。

從來北海道に付て如何なる經營が行はれて居たか、而してその効果如何は頗る趣味ある問題だと思ふので之に付て少しく述べて見たい。

(二)

北海道に始めて和人の足跡を印したのは今より約七百年前鎌倉時代のことであると言はれてゐる、當時より足利時代、徳川時代を通じ、安東氏、蠣崎氏、松前氏はアイヌ(蝦夷人)との事端を懸念し和人の奥地に入るを禁じ函館、福山、江差の三港に番所を設け來航者を檢した、従つて當時和人に依つて拓かれたのは渡島半島の一角に止つたのである、アイヌには農牧開墾の策なく、狩獵に依る原始生活

に終始せるため、北海道の大部分は數百年間荒廢に任されてゐたのである、然るに安永元年露人の來寇に逢ひ、一小藩たる松前氏の力のみを以つてしては之を維持するを得ざるに至り、徳川幕府は蝦夷地を直轄し、函館奉行を置き、露寇防備、アイヌ鎮撫、拓地殖民の大計を樹てた、茲に始めて、鎖島主義は打破せられ北海道拓殖の貴重なる第一歩を踏出したのであつた、然しながら徳川時代には、内憂外患迎接に遍なく、財政甚しく逼迫し、犠牲多き拓殖に専念するを得なかつたが、幾多の志士が憂國の旗を立て、北方探險を決行したのも此の時代のことである、嘉永六年ペルリ來航し其の翌年下田條約により函館開港せられてより天下の視聽は大いに北方に注がるゝことゝなつたのである、然るに拓地殖民のことは短時日を以つて顯著なる効果を収むることは望み得ざるのみならず其の施すところ所謂百年の大計でなければならぬ、明治初年に於ては内地各府縣は其の生産力に比し人口超過し、然も維新の大變革に因る數千萬の失業士族を持つて居たので、國防上、人口政策上

將た國富増進の必要上之を北方無人未開の國土に送り、一は外敵の窺察を未然に防ぎ他はもつて北門の寶庫を拓くべしとなし「北門警備」「北方開發」の二大標語を掲ぐるに至つた、即ち明治二年開拓使を設置したのである、茲に北海道開拓は一新紀元を劃するに至つた、此の年蝦夷を北海道と改稱し十一國八十六郡を置き、開拓志望者に土地を分與する根本策を確定した、當時人口は和人とアイヌとを合せて十二萬一千人、北海道の總面積は五千七百五十五方里であるから一方里當二十一人、九州と四國と臺灣とを併せたよりもまだ三十三方里廣い土地に十二萬人では極めて人煙稀薄と言はねばならぬ、明治二年六月四日長くも 明治天皇は初代開拓使長官鍋島直正に對し左の如き優渥なる勅書を賜つた。

詔

蝦夷開拓ハ 皇威隆替ノ關スル所一日モ忽ニス可ラス汝直正深ク國家ノ重ヲ荷ヒ身ヲ以テ之ニ任センコトヲ請フ其憂國濟民ノ至情 朕嘉納ニ堪ヘズ獨恐ル汝高年遽ニ殊

方ニ赴クコトヲ 然レトモ 朕之ヲ汝ニ委ス 始テ北顧
ノ憂ナカラシ 仍テ督務ヲ命ス 他日 皇威ヲ北疆ニ宣
ル汝方寸ノ間ニアルノミ汝直正懋哉

明治二年八月二十五日には更に東久世長官に左の御沙汰
書を賜つた。

北海道開拓ハ 皇威隆替ノ所係方今至重ノ急務ニ候 今
般彼地へ出張數百里外殊方ノ寒疆ニ其事務ヲ管督候事不
容易艱難一入苦勞 思食候 就テハ向後土地墾闢人民蕃
殖北門ノ鎖鑰嚴ニ樹立シ 皇威御更張ノ基ト可相成様勉
勵盡力可有之旨御沙汰候事
之を以つて見ても當時北門の開拓を如何に重視してゐた
かゞ分明であり、朝野感奮、北門の警備と開拓とに従事し
たことと思ふ。

最初長官は函館に於て事務を統理し、札幌、根室、宗谷
に出張所を置いたのであるが、明治四年には開拓使廳を札
幌に置いた、茲に於て初めて札幌は全道行政の中心地とな
つたのである。

開拓使は、土地の分與、米人ケブロンの雇傭大農計畫の
實施、炭鑛の開發、道路の新設、鐵道の敷設、屯田兵の創
始、學校及病院の設置等、所謂開拓使十年計畫の實施に當
つた、明治十四年計畫一段落と共に明治大帝の御巡幸を仰
ぎ、明治十五年一月開拓使は廢止されたが、前後十三年間
二千一百萬圓の國帑を投じ、開拓の基礎は漸く確立した、
此の間人口は計畫當初に倍加し二十四萬三百人となつたの
である、之を以つて見るも、開拓使は所謂官有物拂下事件
及札幌間鐵道敷設の爲にする道路廢止問題等二三批難せら
るべき點はあつたが、其の業績は爾後の經營に方針と基礎
とを垂れたるものと認められる。

開拓使廢止と共に北海道を、札幌、函館、根室の三縣に
分ち知事を置き一般行政事務を司らしめ、別に農商務省所
管の下に北海道事業管理局を置き、開拓使に屬せし官業經
營の任に當らしめたが、施設統一を缺き、事功上らず、新
創の他未だ一大政廳の下に保護統一するに非ざれば到底所
期の目的を達し得ざることを示現した、依つて明治十九年

北海道廳を置き再び全道を統一することゝなつた。

道廳開設後の十五箇年間は、前代經營事業の整理及新計畫の調査研究時代だつたが、初代岩村長官は特に交通機關の速成と資本及勞力の移入とを計ることを施政の根本とし且着々新計畫樹立の實を練つてゐたのであるが、明治三十四年園田長官は、拓殖十年計畫を成立せしめた、此の案によれば、國費と地方費とを分離し、國費を更に行政費と拓殖費とに分ち、前者は十年間に一千八百十萬圓、後者は二百六十萬圓を支出する計畫であつたが、此の計畫は實施間もなく日清開戦に禍せられ中止又は繰延となり、明治四十二年に至る迄の九箇年間に計畫の半を遂行し得たるに過ぎなかつた、然るに此の間人口は百一萬人より百五十三萬人に、農耕地は二十六萬町歩より五十三萬町歩に増加し、其の生産額は四千萬圓より九千二百萬圓に激増したのである。

明治四十三年河島長官は十五箇年に亘る所謂第一期拓殖計畫の樹立に成功した、此の計畫に依れば、初年度の拓殖費豫算額を二百五十萬圓とし、之を該費の基本額と定め、

次年度以後は北海道に於ける當該年度國庫の自然増収を加算することとし、十五箇年間に七千萬圓の豫定事業を遂行するものである、此の計畫の特色は、拓殖費財源の一部を北海道に於ける國庫歳入の自然増収に求めたことで、豫算編成上の一進歩と言はねばならぬ、大正六年に至り本計畫は二箇年を延長して十七箇年としたけれども、實施過程中歐洲大戰の好影響に依り多額の自然増収を得たので、計畫事業も漸次擴張し、大正十五年迄に、一億五千八百六十萬圓を支出し、其の業績顯著なるものがあつた。

開拓發程以來本計畫滿了迄、約六十箇年一張一弛ありたるは免るべからざるところであるが、國帑を投すること鐵道會計を合せて十一億一千万圓、人を殖ゆること二百四十三萬人、田畑を開くこと七十九萬町歩、總生産額五億餘萬圓、國有鐵道一千六百哩、地方鐵道及軌道四百九十哩、道路延長一萬里、函館外七港の修築竣れるも、未だ未開の土地多く、昭和二年より現行第二期拓殖計畫の實施に移つたのである。